

Title	合成音声によるアクセント研究 : 埼玉県東南部付近におけるアクセントの発話型と知覚型の比較
Author(s)	都染, 直也
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 17 P.21-P.42
Issue Date	1983
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/56461">http://hdl.handle.net/11094/56461</a>
DOI	
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# 合成音声によるアクセント研究

— 埼玉県東南部付近におけるアクセントの発話型と知覚型の比較 —

都 染 直 也

## 1. 1 はじめに

昭和55年夏に、埼玉県東南部（浦和市・川口市・戸田市・蕨市・鳩ヶ谷市・草加市）・東京北部（北区・板橋区・足立区）で、アクセントの実態を調査した<sup>(1)</sup>（図1・2）。調査の目的は、旧荒川を境に東京アクセントと型の区別が曖昧なアクセントが接していることの確認であり、土地はえぬきの老年層を対象に、1～4拍の名詞と若干の動詞について調査した。本稿はその結果に基づいて、昭和57年夏に行なった調査の結果を報告するものである。

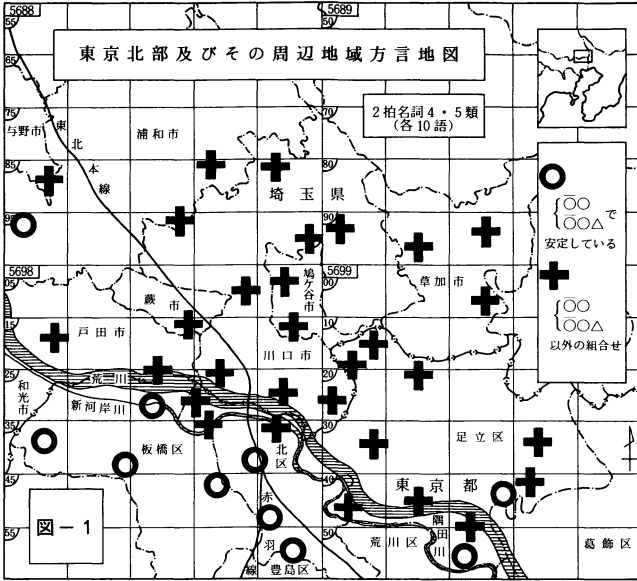
再び埼玉県東南部付近でアクセント調査を行なうにあたり、前回調査の結果から、課題として残された次の2点を調査の目的とした。

- ① 老年層の他に、若年層も対象とする
- ② アクセントの発話型だけでなく、知覚型（アクセント型の聞き取り）も調査する

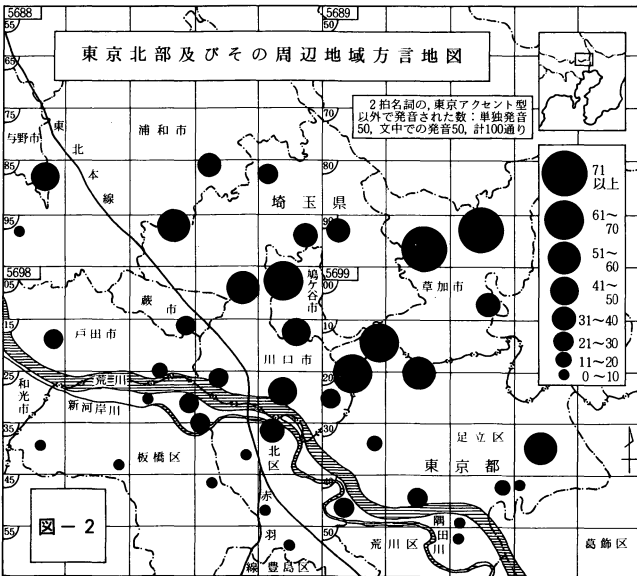
## 1. 2 合成音声の使用

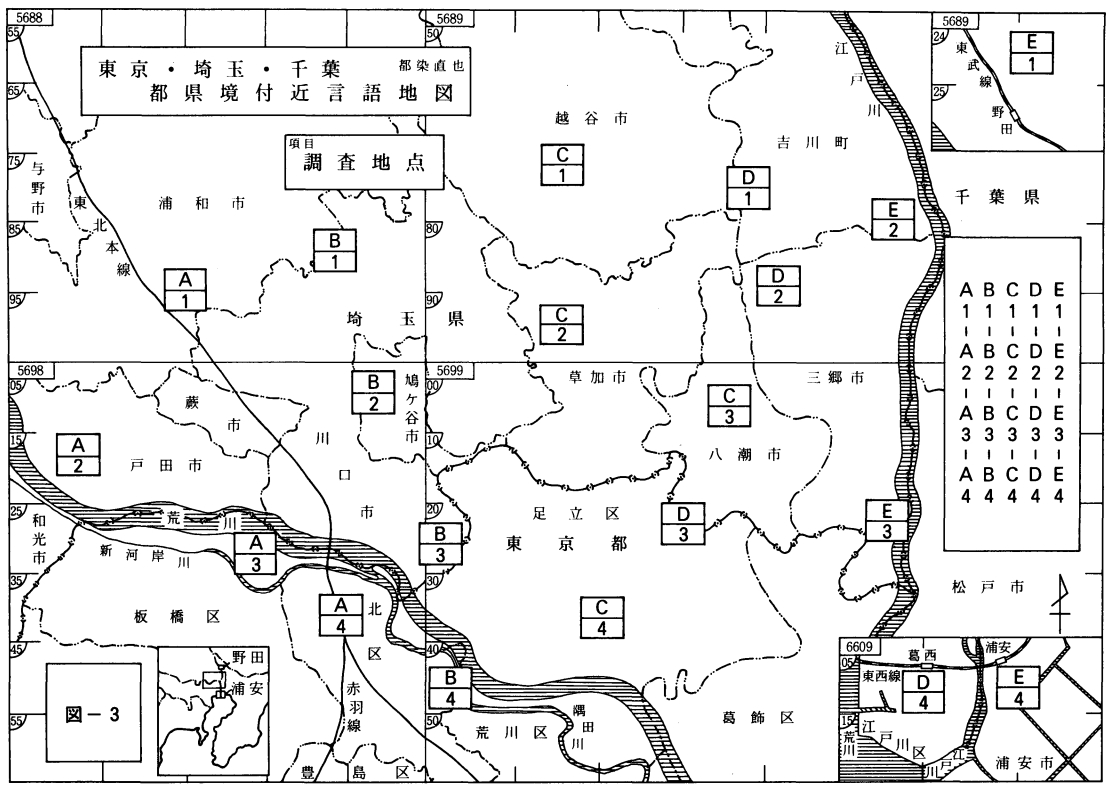
アクセントの知覚型を調査する方法としてはいくつかの方法が考えられる。たとえば、調査者が種々のアクセント型を発音して聞かせる方法があ

(2拍名詞4・5類のゆれ)



(2拍名詞…東京ア以外の数)





る。しかし、この方法では、各回の発音に少しずつ違いが生ずるはずであって、等質的な調査は不可能となる。また、録音したものを聞かせるにしても、それが適切な例であるか否かという疑問が生ずる。その点、多くの人のデータをもとにして作られた合成音声を用いれば、等質的・客観的な調査が可能となる。今回の調査で使用した合成音声は、藤崎博也・杉藤美代子両氏によって提出されたモデルとデータ<sup>(3)</sup>に基づいて、郡史郎氏が合成<sup>(4)</sup>したものである。

### 1. 3 調査対象地域 (図3)

今回の調査では、前記の地域に加えて、千葉県野田市・浦安市、埼玉県三郷市・八潮市・越谷市・吉川町、東京都江戸川区中葛西でも調査を行った。野田市は、金田一春彦氏の調査(昭和12~14年)によると、一型アクセントが行なわれているとされ、葛西・浦安は元来埼玉アクセント系のアクセントが行なわれているとされた地域である。金田一氏の調査によると、今回の調査地域には、以下のアクセントが行なわれていたとされる。<sup>(5)</sup>

- ①館林式ア. : 川口市・蕨市・浦和市など
- ②埼玉ア. : 吉川町
- ③草加ア. : 越谷市・草加市・鳩ヶ谷市・浦安市・葛西
- ④一型ア. : 野田市の大部分
- ⑤京浜ア. : (東京アクセント)

東京アクセントと埼玉アクセント以外のアクセントは、一型アクセントのように全く型の区別のないものか、型の区別があっても曖昧なものである。しかし、これらの地域にも、その後の人口の流入・マスコミの発達に伴い、東京アクセントが勢力を伸ばしつつあり、金田一氏の調査当時とは大きく事情が異なっている。

## 1. 4 インフォーマント

インフォーマントは各地点につき、老年層と若年層からそれぞれ1人ずつとした。老年層の選定基準として、①土地のはえぬき、②60才以上、③外住歴が無い(短い)、④両親の少なくとも片方が土地のはえぬき、などを設けた。なお、20人のうち7人は前回調査のインフォーマントでもある。若年層のインフォーマントの選定基準として、老年層の①・③・④に加えて、②原則として中学生、⑤祖父母(特に同居の)に土地のはえぬきがいる、などを設けた。20地点のうち12地点は「祖父母と孫」という関係である。調査場所は2人を除き、インフォーマントの自宅である。

### 2. 1 発話型の調査(表1・2)

発話型の調査は、対象を2拍名詞に限定した。調査語彙を以下に示す。

- 1類：箱・鳥・鈴・鼻・風
- 2類：胸・川・冬・夏・昼
- 3類：靴・山・塩・花・耳
- 4類：息・糸・傘・肩・松
- 5類：春・汗・秋・鮎・窓 (計25語)

これら25語は、前回調査の結果をもとに選出した。すなわち、各類10語ずつ調査したが、そのうち東京アクセントと異なる型で発音された数(人数)が多い語を選出した。

### 2. 2 調査方法

- ①カード1枚には1語だけ記入。
- ②各語の単独形と助詞付(助詞「が」を付けた文の形)とは別のカードに記入。



表-2 発 話 型 (助詞付)

老 年 層

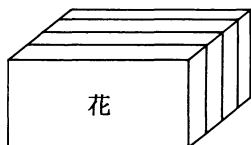
類 型	地 点																計				
	A	A	A	A	B	B	B	B	C	C	C	C	D	D	D	D		E	E	E	E
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
●○▷																				4	4
○●▷					1		1	3				3	2	2	2	8	6	2	3		33
I ●●▷																					
○●▷	10	9	9	9	3	4	10	6	5	5	1	5	6	7	6	6	1	3	3		108
●●▷	1	1	1	7	5		3	2	5	9	5	1	1	2	2	1	1	1	7		55
●○▷						1						4	2		1				7	1	16
○●▷	10	10	10	10	8	10	9	10	10	10	9	6	9	8	10	9	10	10	3	9	180
II ●●▷														1							1
○●▷					2						1										3
●●▷																					
●○▷	1										5	1			1			7			14
○●▷	9	10	10	10	10	9	10	10	8	10	10	5	9	9	10	10	8	10	3	10	181
III ●●▷					1			1													2
○●▷													1				1				2
●●▷																					1
●○▷	9	10	6	10	10	10	4	7	1	7	9	10	1	6	10		4	10	10		134
○●▷	1		4			5	3	9	3	1		9	4		9	6				10	64
IV ●●▷						1															1
○●▷																		1			1
●●▷																					
●○▷	7	9	3	10	10	9	5	9	1	9	10	7		8	9		2	7	10		125
○●▷	3	1	7			1	4	1	9	1		3	9	2	1	10	8	3		10	73
V ●●▷							1														1
○●▷																				1	1
●●▷																					
	A	A	A	A	B	B	B	B	C	C	C	C	D	D	D	D	E	E	E	E	E
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	

若 年 層

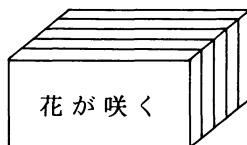
類 型	地 点																計				
	A	A	A	A	B	B	B	B	C	C	C	C	D	D	D	D		E	E	E	E
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
●○▷																					
○●▷	1	1																			2
I ●●▷																					
○●▷	9	9	8	10	6	9	6	10	10	6	8	3	7	9	10	8	2	9	1	2	142
●●▷			2	4	1	4				4	2	7	3	1		2	8	1	9	8	56
●○▷																				1	2
○●▷	10	10	10	10	10	10	10	9	10	10	10	10	10	10	9	9	10	10	9		196
II ●●▷																					1
○●▷												1									1
●●▷					2																3
●○▷																					
○●▷	1											5	1			1		7			14
○●▷	9	10	10	10	10	9	10	10	8	10	10	5	9	9	10	10	8	10	3	10	181
III ●●▷																					2
○●▷																					2
●●▷																					1
●○▷	9	10	10	6	10	10	10	4	7	1	7	9	10	1	6	10		4	10	10	134
○●▷	1		4			5	3	9	3	1		9	4		9	6				10	64
IV ●●▷						1															1
○●▷																					1
●●▷																					
●○▷	10	10	10	10	10	10	10	10	9	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	199
○●▷																					1
IV ●●▷																					1
○●▷																					
●●▷																					
●○▷	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	200
○●▷																					
V ●●▷																					
○●▷																					
●●▷																					
	A	A	A	A	B	B	B	B	C	C	C	C	D	D	D	D	E	E	E	E	E
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	



③カードの配列はランダムにし、同類の語の連続を避けた。単独形と助詞付の配列順は同じ。



A.



B.

④A・B・A・Bの順に、すなわち、単独形・助詞付をそれぞれ2回ずつ読んでもらう。

今後発話型に関するデータは、1人につき、単独・助詞付ともに2回分、のべ50語として扱う（各類5語×2回×5=50語）。

発音はすべて録音し、調査時に記入したものを後でチェックした。調査者は筆者一人。

### 2. 3 老年層の発話型

ここでは全体を概略的に展望するため、地点ごとの特色は扱わず、全体をまとめて扱うことにする。

単独発音の場合：1～3類は様々な型で発音された。各類において東京アクセントと同じ型の占める割合は以下ようになる。

1～3類（○●型）

1類：39/200=19.5%

2類：59/200=29.5%

3類：69/200=34.5%

4～5類（●○型）

4類：168/200=84%

5類：173/200=86.5%

1～3類の語において、東京アクセントとは逆の●○型になる場合が多く、4・5類の結果を含め、全体的に頭高型（●○型）に発音される傾向がみられる。

助詞付の発音の場合：単独発音に比べ、全体的に東京アクセントに近くなっていると言えよう。しかし、各類において東京アクセントと同じ型が占める割合は以下ようになる。

1類（○●▶型）

$$108/200=54\%$$

2・3類（○●▷型）

2類：180/200=90%

3類：180/200=90%

4・5類（●○▷型）

4類：134/200=67%

5類：125/200=62.5%

単独発音と助詞付発音とを比べてみると、全く逆になっていることに気付く。すなわち単独発音では4・5類の語が東京アクセントと同じ型で発音されることが多いのに比べ、助詞付の場合は、4・5類よりも1～3類（1類は●●▶も含めて）の方が東京アクセントと同じ型で発音されることが多い。言いかえると、各類とも、単独が●○型、助詞付が○●▶・○●▷型で発音されることが多い。

老年層インフォーマントの場合、ほぼ一型アクセントの様相を呈するものから、東京アクセントを持つと思われるものまで様々であるが、大半の者は型の区別に曖昧な点がみられる。また、老年層においては非常に聞き取りにくい、つまり、どの型に属するのか判断に迷うような発音が何度かあった。さらに、4人の話者には何回聞いても○●型（京阪アクセントの2拍名詞5類のアクセント型）の如く聞こえるものがあった。これは、●○

型の「おそ下がり」によるものと解釈できるのではないだろうか<sup>(6)</sup>(B 2・B 4・D 3・E 3の話者)。

## 2. 4 若年層の発話型

ここでも全体をまとめて扱うことにする。表からもわかる様に、若年層ではほとんどの者が東京アクセントを持つと言える。東京アクセントでは、○●型の語(1~3類、特に1類)が●●型に近く発音される傾向がある(話者の型意識は○●型)のだが、ここでは●●型と○●型とは一応別個のものとしてとり扱うことにする。また、若年層の場合、ほぼ全員が東京アクセントを持つと考えられるので、各類での東京アクセント型のパーセンテージは省略する。

単独発音の場合：1類には話者による小さな異なりはあるものの、老年層の様な●○型のものはみられない。ただし、E 1(野田市)の場合、のべ10語のうち8語までが●●型である。2類ではD 1(吉川町)が「夏」を●○型で発音した以外は1類と同じ様な傾向を見せている。3類には●○型がいくつかあらわれた。これらは12例あるが、そのうち10例までが「靴」であり、3類の中では異なった存在である。この語のみ第1音声の母音が無声母音であることと関係があろう。4・5類では1例を除いて完全に●○型で安定している。

助詞付発音の場合：1類には○●▷型が2例(いずれも「鈴が」)があるが、老年層の様な●○▷型はみられない。2類ではD 4(葛西)・E 4(浦安)に●○▷型で発音された例がある(いずれも「川が」)。また、B 4(足立区)は「夏が」を○●▶、E 1(野田市)は「川が」を●●▶と発音した。3類には単独形の場合と同じく、頭高型のものが合計14例あらわれた。それらは「塩が」10例、「靴が」3例、「花が」1例であり、他の語と異なる傾向にある。「靴」は1音節目の母音の無声化、「塩」は2音節目が母音音

節であることと関係がありそうである。4・5類では●○▷で安定しており、○●▷型は1例に過ぎない。3類でみられた頭高型傾向は語のレベルのものであって、類全体のものではない。また、老年層でみられた様に、4・5類が単独発音と助詞付発音とで東京アクセントの割合が逆転するという事は無く、ほぼ東京アクセントで安定している。

### 3. 1 知覚型の調査 (表3～5・図4)

知覚型の調査には合成音声を用いたが、郡史郎氏による合成音声には次の様なものがある。

- ① 典型的な●○・●●・○●のピッチパターンを持つ3種の音声「アメ」
- ② 上記3種の「アメ」に、下がって、あるいは下がらずに付く「ダ」を連続させた●○▷・●●▷・●●▶・○●▷・○●▶の5種のピッチを持つ音声「アメダ」。
- ③ ピッチパターンが、●○から○●へ、○●から○●へ、○●から●●へ、●●から●○へと連続的に変化してゆく音声「アメ」。(図4)

### 3. 2 調査方法

①について：3種の「アメ」を4秒間隔でランダムに6回配列し(これを1セットとする)、それぞれ配列の異なった6セットを聞かせる。前半3セットは「雨」に、後半3セットは「飴」に聞こえた時に答えてもらう。

②について：①と同じ様に5種の「アメダ」をランダムに配列した6セットのうち、前半3セットは「雨」に、後半3セットは「飴」に聞こえた時に答えてもらう。

具体的に①・②の配列を示す。

- ①：●○をR、○●をC、●●をHとする。

「雨」の時 1：R・C・H・H・R・C

2 : C · R · H · R · H · R

3 : H · C · R · H · C · H

「飴」の時 4 : C · R · H · R · C · H

5 : R · C · H · C · R · C

6 : H · C · R · C · H · R

② : ●○▷をR、○●▶をC、●●▷をW、●●▶をH、○●▷をYとする。

「雨」の時 1 : W · R · H · W · R · Y

2 : W · C · H · W · C · R

3 : H · W · R · H · Y · R

「飴」の時 4 : Y · H · C · Y · H · C

5 : Y · W · C · H · R · Y

6 : C · H · W · C · R · Y

③について：(図4参照) 1→11、11→1、11→21、21→11、……31→41、41→31の順に聞かせ、各音声は何に聞こえたか、すなわち、「雨」・「飴」・「どちらでもないもの」の3者のうちどれに聞こえたかを答えてもらう。ただし、表4で扱うのは、1→11、11→1、21→31、31→41の場合の資料のみである。

回答方法について：若年層と老年層とで若干異なる点がある。若年層の場合、各自で回答用紙に記入してもらった。老年層の場合は、あらかじめ用意した3枚のカード(「雨」・「飴」・「×(どちらでもない)」と書いたもの)を指さしてもらい、調査者が記入した。記入する際に、案外手間取り、4秒間隔ではついていけないことが多いためである。なお3枚のカードには雨傘や飴の絵も添えた。

### 3. 3 老年層の知覚型

①の場合(表3):「雨」に対して●○だけに答えたのは5人で、いずれも●○の6回すべてに答えている。これに対して○●に答えた者は11名いるが、そのうち●●にも答えたものが9人あり、表でもわかるように、それらは3タイプのすべてに答えたことになる。別に、○●には答えず、●○と●●とに答えた者も4人いる。「飴」に対して○●だけに答えたのは4人であるが、これらの4人は「雨」に対する回答が安定している人ではない。「雨」に対して●○にだけ答えた5人はひとりを除き、「飴」に対して●●・○●のほぼすべての音刺激(12回)に答えている。「飴」に対し、●○に答えたのは2人であるが、そのうちE4(浦安)は「雨」に対しても3タイプに答えている。「飴」に対し●○に答えた者が少ない事は、発話型調査の結果(1類の)から考えると、予想外の結果である。●○型で発音しながら●○型を認めていない。

②の場合(表3):「雨だ」に対し、●○▷だけに答えた者は皆無である。●○▷5回のうちすべてに答えた者が5人いる反面、●●▷5回のうちすべてに答えた者も4人いる。また、すべての人が●○▷とともに●●▷にも答えている。これは、「雨だ」の発音が下降調の場合、実際はアだけが高く、メダが同じ低さにあるというのではなく、漸次低くなっていることの表れであると思われる。ときに、アとダの高低差に比べ、アとメの高低差は小さい。そこでアとダの間で明らかに高低差のある●○▷・●●▷の2タイプをともに「雨だ(●○▷)」と聞くのではなからうか。この傾向は若年層にも見られる。○●▷を「雨だ」と聞いたのは13人だが、配列の都合で前半3セットには2回しか含まれず、そのうちの1回のみで答えた者が多い。しかし、回数を多くしていれば人数・回数とも増したのではないかと思われる。5タイプすべてにわたって答えたのは1人(野田市)、4タイ

プに答えたのは6人である。

「飴だ」に対し、○●▶だけに答えた者は皆無である。多くは●●▶・○●▶・○●▶の3タイプにわたって答えている。●●▶に答えた者も8人おり、そのうち3人は●○▶にも答えている。「雨だ」の場合と同様、「飴だ」の場合には、配列の都合で●○▶・●●▶が3セットの中にそれぞれ2回ずつしか含まれておらず、ほとんどの者はそのうちの1回に答えただけであった。E3(三郷市)は●○▶・●●▶にそれぞれ2回とも答えているが、他のタイプには全く答えていない。また、D1(吉川町)はすべてのタイプに答えているのが目立っている。

### 3.4 若年層の知覚型

①の場合(表3):「雨」に対して17人が●○の6回すべてに答えている。しかし、そのうちの5人は●●や○●にも答えている。したがって、●○に6回答え、他のタイプには答えなかったのは12人である。D4(葛西)は●○に3回答えただけで他には答えていない。逆にB4(足立区)やA1(浦和市)は●○にも○●にも同じぐらい答えている。「飴」に対しては14人が○●7回のうちすべてに答えた。その中には、E1(野田市)・E3(三郷市)のように●○に答えている者、C1(越谷市)・D1(吉川町)・D3(八潮市)のように●●に答えている者も含まれている。したがって○●の7回のみで答えたのは8人である。また、○●に6回答えたのみの者は3人である。

②の場合(表3):「雨だ」には、老年層と同じように●○▶と●●▶の両タイプに答えた者が15人いる。●○▶だけに答えたのは4人で、いずれも5回すべてに答えている。A2は例外的に●○▶には1回も答えていない。しかし、表3の他の部分ではほぼ100%東京アクセントの型に答えていることから、回答記入欄をまちがえたものと考えられる。「飴だ」に対

表-3 知覚型

老年層

語	地点 型	A	A	A	A	B	B	B	B	C	C	C	C	D	D	D	D	E	E	E	E	刺激数
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
雨	●○	4	6	3	6	5	6	6	5	6	6	6	4	5	6	3	6	4	5	5	2	/6
	●●	2		5		3		2		2	1	2	2	5				2	2	1	5	/7
	○●	2					2	2	1				1	5		1		1	2	1	1	/5
飴	●○			2																	1	/6
	●●	1	4	2	4		5	4		3		2	3	4	1	2	5	2		1	1	/5
	○●	6	7	2	7	7	7	5	6	7	7	7	4	7	7	5	6	3	7	6	6	/7
雨だ	●○▷	1	5	1	1	2	4	4	2	5	2	5	4	3	3	4	5	1	5	4	3	/5
	●●▷	1	5	3	2	5	5	5	4	4	3	4	2	2	4	3	1	3	1	3	2	/5
	●●▷	1												1	1		1	2			1	/4
	○●▷	1	1	1		1			1			2	1		1	2	1				1	/2
	○●▷			1								1						1				/2
飴だ	●○▷			1										1							2	/2
	●●▷			1									1	1	1		2	1		2	1	/2
	●●▷	1	4		4	1	4	4	3	3		4	2	1	1		4	3	4			/4
	○●▷	2	1	2		1	5		1	4	1		3	3	2	1	3	2	2		2	/5
	○●▷	2	5	4	5	4	5	5	5	4	2	5	2	2	3	3	4	3	3		3	/5

若年層

語	地点 型	A	A	A	A	B	B	B	B	C	C	C	C	D	D	D	D	E	E	E	E	刺激数
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
雨	●○	4	6	6	6	6	6	6	4	6	6	6	6	6	6	6	3	6	6	6	6	/6
	●●				3			2														/7
	○●	2				1			3							1					2	/5
飴	●○	1							1				1					4		1		/6
	●●								1	1			5	1		3						/5
	○●	5	6	6	7	7	7	6	6	7	7	7	7	7	7	3	7	7	7	7	7	/7
雨だ	●○▷	4		5	5	5	5	5	4	4	5	5	5	5	5	5	5	3	5	5	1	/5
	●●▷	2	1		4	1		1	2	2		3	3	5	1	2	3	3		4	3	/5
	●●▷		1					1													1	/4
	○●▷		2						1												1	/2
	○●▷		2										2									/2
飴だ	●○▷																	2			1	/2
	●●▷											2			1					2		/2
	●●▷	1			1	4	1	1	1	3		1	3	3	3	3	3	1	2			/4
	○●▷			1	3	1			1	2	1	3	4		1		3	1		1	1	/5
	○●▷	3	5	4	5	4	5	5	5	5	2	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	/5



し、○●▶だけに答えたのは1人だけである。同時に●●▶・○●▷にも答えた者が多い。C4（足立区）の場合、○●▶には5回とも答えながら他の3タイプにも答えている。老年層と同じように、●●▶・○●▷・○●▷の3タイプに答えた者が多いが、●●▷には老年層ほどは答えていない。

### 3. 5 知覚型③（老・若）（表4・5）

この調査では、老年層・若年層ともかなり個人差がみられたが、あるひとつの音刺激に対し、「雨・飴・×」の3つにそれぞれ何人が答えたかをグラフ（表4）や三角図表（表5）に表わすことにより、老年層・若年層の大まかな傾向が把握できた。なお、表5では刺激数が88となっているが、これは、3. 2の③で説明したように、逆の場合があるためである（ $11 \times 4 \times 2$ （正・逆）=88）。

老年層・若年層と比較するために、東京生まれの大学生5人についても同じ調査をした。表5中のc.f.欄がその平均値である。

老年層の場合：全体的な傾向として、どの音刺激に対しても「雨」か「飴」に答える。すなわち、×印（どちらでもないもの）を指ささないということである。表5の三角図表を見ればわかるように、のべ88回の音刺激に対して1回も×印を指ささなかったのは20人中12人である。しかし、残り8人についても×印を指さした場所を検討してみると、納得のゆかない場合が多い。これら8人をひとりずつ検討してみる。（指さした音刺激の番号を示す）

A 1：11→1の時、11と2に×

A 2：1→11の時、1～4に×

A 3：×印の場合のみならず、全体的にみても反応に一貫性がみられず、どの音刺激に対しても「雨・飴」どちらにも聞こえるようで、×印についても信頼できない。

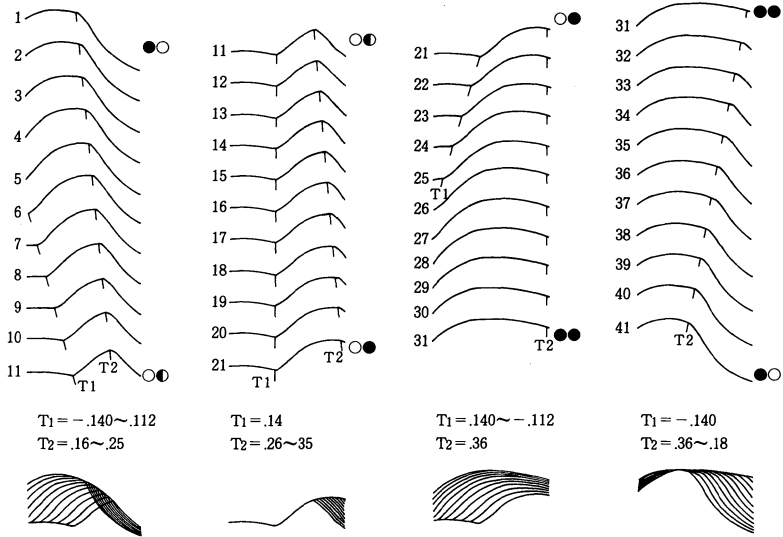


図-4 実験に使用した音刺激のF0パターン

表-4

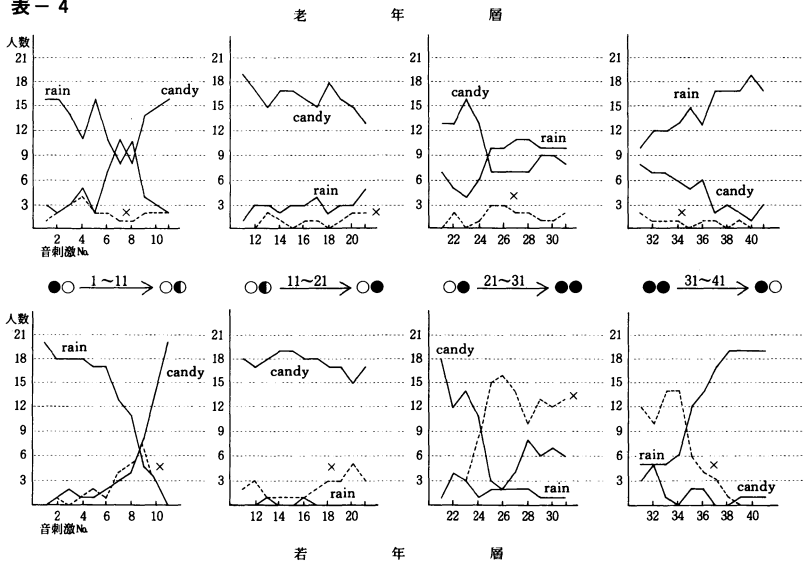
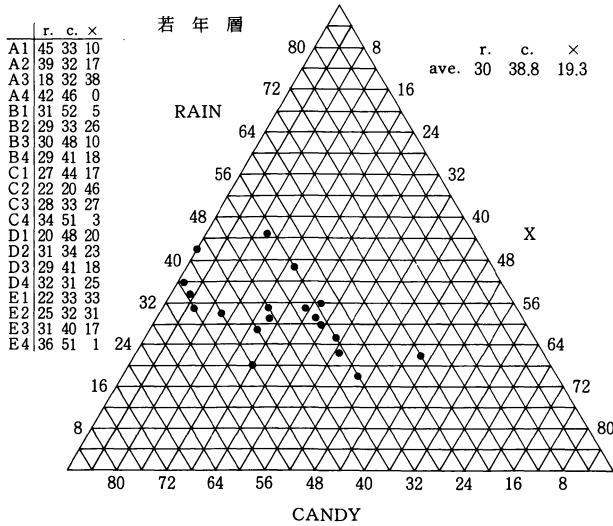
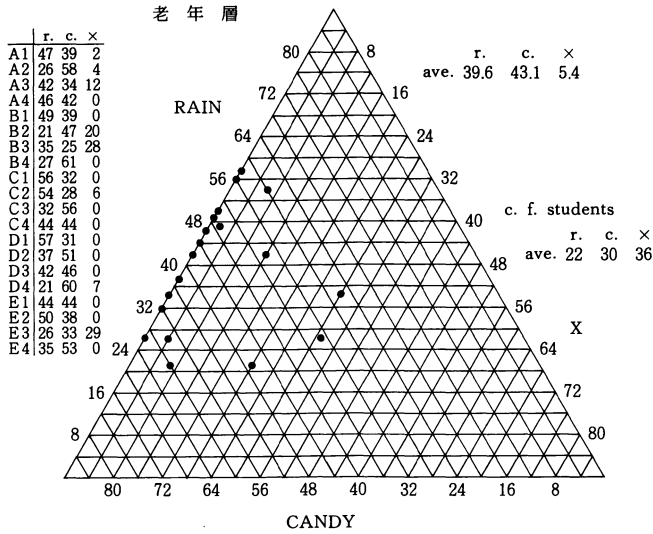


表-5



B 2 : 多少ズレがあるが、ほぼ東京アクセント的な反応。

B 3 : A 3 に似た反応。

C 2 : 2 ~ 4 ・ 6 ~ 8 に×印。

D 4 : 東京アクセント的な反応パターン。

E 3 : A 3 ・ B 3 に似た反応。

以上8人についてまとめると、B 2 ・ D 4 はほぼ東京アクセント的な反応パターンで×印を付けている。A 1 ・ A 2 ・ C 2 の3人は1ヶ所だけにまとめて×印を付けているので、B 2 やD 4 とは同じレベルで考えられない。A 3 ・ B 3 ・ E 3 は「雨・鮎・×」の数だけに着目すると大学生の結果に近い(表5)が、極端に言えば、雨・鮎・×と順番に答えた様なもので、偶然三者が同数に近付いたに過ぎず、聞き分けた上での結果ではない。

若年層の場合：A 4 だけが1度も×印を付けなかった。×印の場所を無視して数のみ平均してみると19.2回で、老年層の5.4を大きく上回るが、大学生の約半数に過ぎない。A 1 は「雨」と答えた場所に疑問が残る(○●や○●の部分で答えている)。又、21-31の間で「雨」と答えた者が数人いた。若年層の知覚型はほぼ東京アクセント的であると言えようが、大学生の資料と比較してみると、アクセント型の許容範囲が広い様に思われる。

表4によって若年層と老年層の比較をしてみると、21→31、31→41において、特に●●型に対する反応のし方が大きく異なっている事がわかる。これは若年層と老年層との型を区別する能力の差が反映されたものと考えられよう。

#### 4. 結び

老年層発話型の単独形は、非常に混沌としている(表1)。A 4 だけは東京アクセントと言えそうである。逆に、C 1 ・ C 3 ・ D 2 ・ D 4 ・ E 1 ・ E 3 ・ E 4 は1 ~ 5類を通して●○型が多い。特にE 1 はすべて●○型で

あるし、C1も1回目にはすべて●○型であった。又、D1は全体的に○●型が多く、特に4・5類のべ20語中●○型は2語しかない。

助詞付の場合(表2)には単独形の様な混乱は少ない。各類とも2つのグループに分かれる。1類:○●▶(●●▶)と○●▷、2・3類:○●▷と●○▷、4・5類:●○▷と○●▷。単独形で●○型の多い7人について調べてみると、C1・D2・D4・E1・E4は○●▷型が多く全体的に●○・○●▷という組合せになる。E3は●○・●○▷という組合せ、C3は単独発音の場合には型の区別が無いかの様であるが助詞が付くと1類●●▶、2・3類○●▷、4・5類●○▷という様に東京アクセント的な型の区別がみられる。

●○・○●▷の組合せについて加藤正信氏は次の様に述べている。<sup>(7)</sup>( )  
内筆者注。

尾高型(4・5類の)が頭高型に変化する際の過渡的現象として、小岩・西船橋・北行徳あたりでは、助詞のない場合には「 $\bar{\text{O}}\text{O}$ 」と頭高、助詞がつくと「 $\text{O}\bar{\text{O}}$ が」と尾高になるという事実がみられる。文としてより、単語だけの方が東京アクセント化しやすいのだろうか。

加藤氏は1～3類の語には言及していないが、私の調査した結果では4・5類のみならず、1～3類にも●○型が多く、助詞が付くと1～5類を通して○●▷型が多い。このことから私の調査した地域の●○・○●▷という組合せは東京アクセント化というよりも、むしろ発音時の「癖」のようなものであって、それが型の区別の曖昧さにつながっているのではないだろうか。さらに、発話型と知覚型の不一致の原因のひとつとも考えられよう。

老年層のD2(三郷市)を例にとってみる。単独発音は表1のように全体的に●○型が主で、一型アクセントに近い様相を呈している。しかし、知覚型では「雨」に対して●○だけに6回、「鉛」に対しては●●に1回、

○●に7回答えており、「飴」に対して●○には全く答えていない。「飴」は1類の語であるのに、発話型の1類はのべ10語中6語を●○型で発音しており、また、その反面●○を「飴」には聞いていない。助詞付の場合でも、1～5類ともに○●▷型で発音されているにもかかわらず、○●▷を「雨」とは聞いていない。老年層C3（八潮市）の場合では、単独型の発音がほぼ全部●○型であるが、助詞が付くと1類●●▶、2・3類○●▷、4・5類●○▷と型の区別が有るかのようである。知覚型でも●○・●○▷などを「飴」とは聞いていない。助詞が付いた時に本来のアクセントがあらわれやすいということであろうか。

結果をまとめるにあたって、反省点をいくつか挙げてみる。発話型と知覚型が一致しない場合、発話型について話者の内省を求めてみたり、話者自身の発音を聞かせてその知覚型を調べてみたりすることが必要であろう。また、知覚型については、どういうレベルで聞いているのか、たとえば、自分の方言としてか、共通語としてかなどを確かめることも不可欠であろう。さらに、知覚型については時に個人差が大きくあらわれることがあるので、1地点にひとりずつの調査では不十分で、そこには地理的な差ではなく、個人差が表われたに過ぎない場合があることも考えられる。

今回使用した合成音声は、大阪方言話者の発音を基にしており、関東地方での使用は不適切であったかも知れない。各地方に合ったものを作る必要があるのかどうかは今後の課題である。

末筆ながら、調査に協力して下さったインフォーマントの方々、合成音声とそのデータを提供して下さいました郡史郎氏に心から御礼申し上げます。

本稿は東京外国語大学大学院に昭和57年度の修士論文として提出したものをまとめ直したものである。

## 注

- (1) 都染直也「東京北部及びその周辺地域におけるアクセントの実態」日本方言研究会第34回研究発表会発表原稿集 昭和57年。
- (2) 真田信治・小沼民江「大都市北辺における方言分布の実態」日本方言研究会第26回研究発表会発表原稿集 昭和53年。
- (3) Hiroya FUJISAKI and Miyoko SUGIRON: "Acoustic and Perceptual Analysis of Tow-mora Accent Types in the Osaka Dialect" Annual Bulletin 10 Research Institute of Logopedics and Phoniatrics University of Tokyo
- (4) 合成はターミナルアナログ型シンセサイザ (Öve III, Fonema) によるもので、ミニコンピュータ (HP 200) でコントロールしたもの。合成場所は CENTRO DI STUDIO PER LE RICERCHE DI FONETICA DEL C.N.R. (CNR 音声研究センター) PADOVA ITALIA
- (5) 金田一春彦『日本語方言の研究』東京堂 昭和52年8月。
- (6) 杉藤美代子「“おそ下り”考 — 動態測定による日本語アクセントの研究 (その一)」大阪樟蔭女子大学論集10 昭和47年。
- (7) 加藤正信「変化する郊外のことば — 東京の東側 — 」『言語生活』225 昭和45年。

## 参考文献

- 金田一春彦『日本語方言の研究』東京堂 昭和52年8月  
 杉藤美代子『日本語アクセントの研究』三省堂 昭和57年8月